



2025年10月1日
大阪府立水都国際中学校・高等学校
校長 太田 晃介

大阪府立水都国際中学校・高等学校のIB教育推進：新たな公立学校の挑戦

大阪府立水都国際中学校・高等学校は、日本語と英語のDLDP（デュアルランゲージ ディプロマプログラム）の認定を受けた、併設型中高一貫の公立学校です。本校は、大阪において公立高校として初めてIB教育を推進するために、ゼロから創設された新設校です。

IBプログラムを単なる一部のコースとしてではなく、学校全体の教育の柱として確立するため、本校では独自の校内支援体制を構築し、IB教育のさらなる深化と発展に取り組んでいます。ここでは、その具体的な工夫と実践を3つに分けてご紹介します。

1. IB部の設置と組織的な連携

本校は、IB教育の組織的な推進を図るため、校務分掌としてIB部を設置しています。IB部の主任は、DPC（ディプロマ・プログラム・コーディネーター）の教員が兼任し、学校運営会議のメンバーとして、IBに関する提案や取り組みを直接、学校管理職に伝える役割を担っています。これにより、IBプログラムに関する重要な決定が迅速かつ円滑に行われています。IB部には、インターナショナル教員8名とローカル教員2名、計10名の教員が所属しています。そのうち5名はIB部専属として、IBプログラムの運営に集中して取り組んでいます。

IB部は他部署との連携も重視しています。授業やカリキュラムに関しては教務部と、コース選択や大学進学に関しては進路指導部と緊密に連携を取りながら、IB教育を進めています。特に、高校1年生から2年生へのコース選択では、IBコースへの要件をIB部と進路指導部が中心に議論・提案しており、全校的な視点でプログラムが運用されています。この組織体制により、インターナショナル教員が授業以外の校務や学級運営にも積極的に関与する機会が増え、日本の公立学校の運営に対する理解も深まっています。

2. 学校全体でIB教育に関わる機会の創出

本校では、IBコース以外の生徒もIB科目を履修する機会を設けています。高校生の1学年160名のうち、高校2年生への進級時、IBコースに進む生徒は約20名です。残りの生徒は、グローバルコミュニケーションコース（GCコース）とグローバルサイエンスコース（GSコース）に分かれます。これらのGC・GSコースの生徒も、高校2年生と3年生の「総合的な探究の時間」でTOK（知の理論）を、英語の授業でIB英語（English B）を履修します。希望者には、科目サーティフィケートの取得に挑戦することも可能です。GC・GSコースのTOKの授業は、IBコースを担当する教員（TOKコーディネーター）を中心に、各学年団の教員と4名のチームを組んで担当しています。これにより、1人の教員が受け持つ授業の準備負担を軽減しつつ、より多くの教員がTOKの指導に携われるようになります。この取り組みを通じて、IB教育の指導経験を積んだ教員は、最終的にIBコースのTOKを担当するまでに成長しています。

IB英語の授業も同様に、インターナショナル教員が担当しており、IB教育の視点を学校全体の英語教育に反映させています。この仕組みは、IB教育を学校全体に浸透させるための重要なツールとなっています。

3. 教員研修への多角的な支援

質の高いIB教育を提供するためには、教員への継続的な研修が不可欠です。本校は、公立学校でありながらも、国家戦略特区制度を活用した公設民営の学校であるという特性を活かし、教員研修に手厚い支援を行っています。IBの授業を担当する教員は、学校の予算でIBのワークショップに派遣されます。これとは別に、自己研鑽を目的とした研修に参加するための費用を、補助する校内の制度を設けています。IBの授業を担当していない教員もこの制度を活用して、個人的にIBワークショップに参加することができます。このようにIBの授業に関わらない教員でも、積極的に研修に参加しやすい環境が整えられています。結果として、多くの教員が専門分野やIBコア科目のワークショップに参加し、学校全体のIB教育の質が向上しています。

まとめ

大阪府立水都国際中学校・高等学校では、IB部の設置、IB教育の全校展開、教員研修の支援という3つの柱を通じて、IB教育の深化と発展に取り組んでいます。これらの独自の実践は、日本の公立学校におけるIB教育の新たなモデルを構築するものであり、今後の教育の可能性を広げる挑戦です。本校は、これからもIB教育を軸に、国際社会で活躍できる人材の育成を目指してまいります。